The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	まえがき
Author(s)	秦, かおり
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

まえがき

本プロジェクト「相互行為研究① － 会話とナラティブを分析する」は、ナラティブ研究も会話分析もお互いに相互行為に着目した観点を持っており、これらの分析的主眼を持つ研究者が共同研究をすることによってお互い得るものがあるという考えのもとに立ち上げられたものである。

ナラティブ分析と会話分析は、全く異なる視点と目的をもって、異なる分野として発展して来た。物語研究から始まったナラティブ分析は、Labov が言語学的に語り―ナラティブ―の「型」を提唱したことから始まり、次第に語りの中の変化（プロセス）をみたり、ナラティブの定義を研究目的に応じて変遷させながら発展していった。近年では、語りにおける相互行為（語り手と聞き手のインターアクション）が語りにどのような影響を及ぼすのか、またそのような影響下で語りに投影されるアイデンティティとは何かといった点が注目されている。一方、会話分析は社会学に端を発し、その会話の中の相互行為を分析し、その行為が何故そこで行われたのかを詳細な書き起こしと分析をもとに論じる研究である。かつては（あるいは近年でも）、ナラティブ研究者の中には会話分析は「詳細すぎて分析の幅が狭い」といった主張をする者もいれば、会話分析研究者の中にはナラティブ研究は「客観的実証的でない」とする者もいる。本プロジェクトはそれらの主張があることを受け入れつつも、それぞれの利点を活かそうと試みている。

この論文集にはそれぞれ視点が異なる研究が収められている。佐藤はナラティブ分析と会話分析について概観し、秦はインタビュー場面に現れる相互行為の中の機能の１つとしてのナラティブ分析を行っている。岡田は会話分析を英語教育に応用した実証的分析を行っている。それに続き、学生論文においては、甲斐は電話会話の終了部に現れる「はい」についてコーパスを利用しながら分析し、泉谷はバフチンの言語論が分析概念として部分的に援用可能であることをナラティブ分析と会話分析を用いながら論じており、松谷は教育場面における発話の修復について会話分析の手法を用いて試論を展開している。

上記のように明らかな違いがありながらも「談話研究」と一括りにされることもあるナラティブ分析と会話分析だが、学際的研究の必要性、社会還元性の必要性が叫ばれる今、このように各分野におけるアプローチや主眼の違いを理解し、お互いに手を取るべきところは取り合い分野の垣根を越えたプロジェクトを行うことは非常に意義があることと考える。読者には本プロジェクト論文集に収められている論文のバラエティに着目し、楽しんでいただけたら幸いである。

研究代表者　秦　かおり

2015 年 4 月